

書 評

金田章裕著 オーストラリア歴史地理：地人書房、1985年、A 5 版、282頁、3,800円

海外調査は、見知らぬ国やなじみの薄い地域の紹介といった意味を兼ねていた時代から、今や完全に「研究」の時代に入ったといえる。最近では、いわゆる情報化社会の影響によって、世界各地の文化・歴史や自然をはじめ、さらには現在起こっている生の出来事に至るまで、さまざまな情報を、居ながらにして把握できるようになってきた。その情報は、量の豊富さはいうまでもなく、幅の広さや正確さに関しても、これまでとは比較にならないほどのものである。そのことは、地理学の分野に限っても例外ではなく、世界各地から伝えられる豊富な情報をベースに、地域研究の内容も大きく変わろうとしている。今では、地元の学者達との共同研究も相い次いで行われるようになっており、日本人研究者の国際化は、飛躍的に進展してきたといえよう。

しかしながら、最近までオーストラリアに関する情報は、「東経135度上の隣人」といわれているほどには、必ずしもスムーズに入ってはこなかった。赤道をはさんで太平洋の両端に位置しているとはいえ、ほぼ同じ距離を隔てているアメリカ合衆国に比べると、われわれのオーストラリアに関する知識は、これまではなほだ乏しかったといわざるを得ない。こうした背景には、オーストラリア自身が、現在まで大量の移住者を受け入れてきたことに代表されるごとく、内的な側面により多くの注意を払ってきたことも原因していると考えられるが、いっぽうでわが国の視線が、大きく欧米を中心に向いていたこともまた事実である。

ところが、最近の国際貿易についてみると、わが国とオーストラリアは、ともに重要な相手国となってきており、相互の関係は、今後さらに緊密になっていくことが予測される。それとともに、地理学の分野においても、これまでも増して、交流の進展が期待されている。

こうした中で、金田章裕氏著『オーストラリア歴史地理』が刊行された。開拓当初のオーストラリアにおける都市と農牧地の方格プランについて、歴史地理学的手法を駆使することによって、分析が試みられている本書の全体は、2部構成をとっており、そのうち都市の方格プランの形成を中心とする第I

部が2章より、また農牧地のそれを中心とする第II部が5章（4章+終章）より成っている。以下、各章ごとに、それぞれの要点のあらましを紹介していきたい。

第1章；「植民地時代のオーストラリアと歴史地理学のアプローチ」は、オーストラリアに関する地理学的な視点と、具体的な研究方法の説明にあてられており、オーストラリアの自然条件を概観し、続いて州（旧植民地）単位に進められた開拓のプロセスについて、歴史地理学の分野を中心とした地元研究者の手による成果をもとに、類型化を試みている。冒頭にあつて、次章以下への導入を兼ねた部分といえる。

本論の最初の章ともいうべき第2章；「都市の方格プラン」においては、現在各州の首都となっているシドニー、ブリスベン、パース、メルボルン、アデレードなどの事例をもとに、多数の古地図を用いながら、旧植民地を単位とした都市の方格プランの設定・形成プロセスと、その特徴について検討を加えている。その結果、それぞれの都市プランには、旧植民地ごとに卓越する一定の共通性が認められることを指摘し、それらの類型化を試みている。旧植民地および開拓当初のオーストラリアにおける都市のプランには、都市計画に関与した総督や測量長官らの個性が、強く反映していたのであった。

いっぽう、農牧地の方格プランに関して、「方格プラン導入前夜」と題された第3章は、オーストラリアの中でも、最も早くから入植が進められたニュー・サウス・ウェルズのカンバーランド近辺と、さらにヴァン・ディーメンズ・ランド（タスマニア）とを例に、入植初期の段階における土地区画の進展と、方格プランの導入に至る具体的な事実経過とを、古地図や当時の書簡を用いながら、解説している。

続く第4章；「ニュー・サウス・ウェルズ植民地における方格プランの導入と破綻」では、前章の内容を受けて、ニュー・サウス・ウェルズにおける方格プランの実施および実際の進行状況について、さらに詳しい検討が加えられている。ここでは、植民地政府の責任者である総督や、土地測量・土地区画の実施責任者である測量長官らによって残された書簡や指示書・報告書などが、中心的な史料として用いられており、方格プランの設定・実施、さらには

その破綻に至る複雑なプロセスを、きわめて具体的に描写している。

第5章：「方格プランをめぐるさまざまな対応」は、前章の続章ともいうべき部分で、同様の研究目的のもとに、ヴァン・ディーメンズ・ランド、西オーストラリア、ポート・フィリップ地区（ヴィクトリア）の各事例について、方格プランの導入または実施の経過や実体に関する検討を試みている。その結果、方格プラン導入に対する対応は、地域によってさまざまで、その展開の背後には、自然条件と入植・開発プロセス、さらには土地政策・測量を実施した人々の個性が強く反映していたことを指摘している。

本論の最終章ともいうべき第6章：「南オーストラリア植民地の方格プラン」では、これまでの事例地域とは全く異なる理念によって開かれた、南オーストラリアの具体的な開発プロセスの概要と、地域によって違うさまざまな規格の方格プランとについて、当時の土地政策と関連づけながら、詳細な検討が加えられている。

最後の「終章」は、本書全体のまとめともいうべき部分で、オーストラリアの開拓に際して設立された6カ所の旧植民地における、方格プラン導入の背景ないしその理由、さらには、設定・実施されたさまざまな方格プランとそれらの特性について要約している。

以上、各章ごとに、それぞれの内容のあらましを通覧してきた訳であるが、全体的な特色としては、方格プランにまつわる非常に詳細な事実経過が復原されていることである。忠実に復原されたこれら過去の事実関係は、今後、オーストラリア研究をめざす者にとって、不可欠の情報となっていくに違いない。

そのことは、また本書に掲載された図の大半を占める「生の一次史料」についても、いえることである。本書の本文中には、全部で73枚の図が挿入されているが、そのうちの約70%は、開拓時代初期の測量図や、その後の地形図等をそのまま掲載したものである。これは、一見オリジナルな図が少ないという印象につながりかねないが、著者の意図する中心は、さしあたりそうした図（史料）そのものの分析にあるのではなく、むしろ、図（史料）に見られるような土地区画が、どのようにして導入され実施されるに至ったか、という点にあることを見逃しては

ならない。史料は、あくまで「生」でなければならぬのである。また、これら「生の史料」は、冒頭においても触れたように、同時に、これまで不足していたオーストラリアに関する情報の、直接的な紹介を兼ねていることにもなる。

最後に、評者の一方的な希望をひとこと述べさせていただくと、方格プランの導入や実施に際し、その背後にあって、おそらく必然的な影響力をもっていたと考えられる自然条件を、もう少し具体的に対応させていただきかけた点である。開拓初期の段階はいうまでもなく、開拓のプロセスには、常に自然的な条件が大きく左右していたことは、気候や土壌、さらにはそれらを反映する植生などに関する当時の記録から、明らかである。ヨーロッパ人入植以前の状況を、なお多く残すといわれるクイーンズランド州や西オーストラリア州の北部、さらには北部地域などに展開する、あまりにも巨大な自然景観を目にした時、こうした思いは一層深まっていくことになる。

いずれにしても、著者の歴史地理学に関する素養は、わが国の条里制や古代・中世村落にかかわる一連の研究によって、衆目が一致して認めるところである。そうした手がたい手法によってつらぬかれた本書は、オーストラリア研究者や、これからそれを目ざそうとしている者にとって、必読の書となるであろう。また1988年には、オーストラリア（シドニー）でIGCの大会が予定されている。これを機会に、約200年間にわたって、この巨大な大陸の開拓に挑み続けてきたオーストラリア人の底知れぬエネルギーと、その歴大な背景を垣間見ようとする者にとっても、本書はかけがえのない一冊となるに違いない。（片平博文）

高木勇夫著 条里地域の自然環境：古今書院、

1985年、A5判、238頁、3,000円

本書は次の5つの章で構成されている。

第I章 地形地理学あるいは地理的地形学の視点
(pp. 7~12)

第II章 自然的基盤としての沖積低地の地形(pp. 13~57)

第III章 盆地の条里地域と自然環境(pp.58~100)

第IV章 沖積平野の条里地域と自然環境 (pp. 101~183)